

日文研究室だより

二〇〇七年度

会長 彦坂佳宣

本誌「論究日本文学」は一〇年以前に年一回から二回の刊行に切り替えて以来、時に発行の遅れはあるものの、まず順調にこれを維持しています。刊行費用も、この低金利の時代にもかかわらず、しっかりと会員の存在、また大学の補助によって何とか経費をまかなっています。

原稿は、原則として専任教員の論文を載せること、毎年六月に行われる「立命館大学日本文学会」の大会発表を経たもの、また学生会の研究會「談話會」でのもの、教員志望学生と現場教員との合同の「国語教育ゼミ」のもの、そして修士・博士論文から生まれたもの、さらに多くの卒業生のもの、時には依頼した原稿で成っており、このシステムが今のところ良好に働いているのです。

年に数回持たれる「談話會」は、以前はやや寂しいこともありましたが、近年は世話人の努力や院生の増加があり、かなり盛況が続いています。議論も活発で、特に近代文学研

究の多様な視点や方法のものが加わり、それが古典分野の研究視点にも刺激を与えているようです。院生の増加は原稿が生まれる素地となり、教員も多忙な中をやりくりし交代しながら、全体として良く研究的水準と定期刊行を維持していると言えるでしょう。

こうした反面、いくつかの問題もあります。

まず、院生の研究が自己の専門分野に集中しがちで、広い研究視野を体験し、学問的な裾野の広がりを用意する期間が短いように感じます。専門性が重視される傾向にもよるのでしょうか、それによって、近代分野の学生と古典のそれが交流しないまま院生を終えがちです。学年間の交流も少ないことも問題です。多分、これは受講傾向についても言えて、古典と近代の授業の受講生がその専門性にに応じて分かれがちになる傾向があります。私は日本語学の担当ですが、昔のように文学専攻の学生が沢山受講することも少ないのです。文学の基礎としての語学、近代

あるいは古典の基礎に逆の分野が貢献することもある、こうした点を院

生も学生も、また教員側も、今までより少し強く認識しておく必要があるように思います。

もう一つは、世代や研究態度の継続性の問題です。日本文学会の大会に、定年前後のOBの参加が減り、若い研究者や院生が多くなりました。また、07年度の非常勤はかなり入れ替わった陣容になります。これらの変化が新生面を開く良い方向に動くことと、従来の到達面をうまく継承することの両面に働けば良いと思います。幸いに、近年では学際的な視点、文学テキストを超えた素材を含む研究、また従来からの民俗学といった多彩な分野の研究が行われて、この専攻の特色となっています。各時代や文学・語学を含む広い分野にそれぞれ専任教員が居るのも強みでしょう。こうした中で学生・院生が刺激を受けて育つてくれるように願っています。

もう一つ深刻なのは、学生の勉学離れですが、この点はもう切りがなくなるので止めておきます。

(二〇〇六年度主任)